

日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ
2001年 冬号 No. 22

発行 日本行動分析学会 理事長 小野浩一
〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1 駒澤大学文学部心理学研究室
電子メール: j-aba@komazawa-u.ac.jp
電話: 03-3418-9303(心理学研究室事務室)
FAX: 03-3418-9126(日本行動分析学会事務局と明記して下さい)
ホームページアドレス: <http://behavior.nime.ac.jp/~behavior/>

高齢者介護の実践と行動分析学からの提案

公開講座のお知らせ

主催: 日本行動分析学会 後援: 日本老年行動科学会

- <日時> 3月11日(日) 午後2時～5時
<場所> 慶應義塾大学三田キャンパス西校舎1階513号室
(東京都港区三田2-15-45; JR山手線・JR京浜東北線
「田町駅」徒歩8分)
<講演内容・演者>
司会: 長田久雄(東京都立保健科学大学)、島宗理(鳴門教育大学)
事例1: 「特定の人に対して繰り返される暴言や暴力の対処」
柳原来央(特別養護老人ホーム小鳩園、ケアワーカー)
事例2: 「失語症で不穏状態、転倒を繰り返す人とのコミュニケーションと支援」
川島健一(特別養護老人ホーム木更津南清苑、介護課長)
事例3: 「思うようにならないと適応困難になる入居者への援助」
鈴木信一(特別養護老人ホーム大磯恒道園、ケアワーカー)
コメンテータ: 杉山尚子(山脇学園短期大学)、北川公路(駒澤大学)、
伏見貴夫(東京都老人総合研究所)

平成12年に介護保険制度がスタートし、高齢者介護の状況は大きく変わりつつあります。人口の高齢化にともない、この問題はこれからますます重要になってくるでしょう。これまで、主に教育や福祉の分野で応用されてきた行動分析学ですが、最近では企業や医療からも、その問題解決力の高さに注目を集めています。高齢者介護の現場から聞こえてくる様々な問題の多くは、行動マネジメントに関するものであり、それは行動分析学が最も得意とするテーマです。

今回は、日本老年行動科学会から現場でご活躍されている方に事例を発表していただけることになりました。高齢者介護の実践現場には、行動マネジメントに関するどんなニーズがあり、どうすれば解決していけるのか、行動分析学のアプローチを提案しながら、共同で検討します。

高齢者介護の仕事をされていて効果的なアプローチを模索しておられる方、将来介護の仕事をしようと勉強されている方、介護の分野で行動分析学を応用しようと考えていらっしゃる方、その他、介護やエイジングの問題に興味のある方は、ぜひご参加下さい。なお、この公開講座はインターネットでライブ中継されます。遠隔地にお住まいなどで、当日会場に来られない方はそちらをご利用下さい。 <http://www.naruto-u.ac.jp/~simamune/J-ABA-Seminar.html>

看護学と行動分析学の接点: シリーズ 現場に行く(第2回)

看護の現場から

鎌倉やよい(愛知県立看護大学)

21世紀が始まりました。私は10年ほど臨床看護婦として癌看護を実践し、現在は成人看護学の

外科系領域を教えています。振り返ってみると、20世紀は医療技術が飛躍的に進歩した時代でした。外科領域では、医薬品や医療機器の発展に支えられた麻酔・手術の技術革新によって、これまでの手術適応が拡大され、手術方法も変化しました。高齢者に手術が適応されたり、内視鏡下手術が可能となり、さらには移植医療が開始されたことは最大の変化といえましょう。他領域では、放射線治療、化学療法の実現、体外授精技術の確立さらには遺伝子治療へと進みつつあります。このような技術革新によって治癒をめざす一方で、治癒しない病気があることを認めた時代でもありました。“cure”から“care”へと提唱され、患者の生活の質(QOL)が求められてきました。慢性疾患患者は病気と共存して生活する方向に、癌患者はインフォームドコンセントによって治療方法を選択する方向に変わりつつあります。

このような時代に働く看護婦(士)は、実に広範な知識と技術を要求されます。責務を果たすためには、確実な知識による判断と技術で対応することが重要ですが、医療技術の革新は新たな知識と技術を看護に求めます。また、看護婦は個人の専門が保証されているとは言い難く、勤務部署が変われば異なる領域の知識が要求されます。ようやくの感はありますが、看護の基礎教育を大学教育に移行してきたことは20世紀の大きな成果でありましょう。さらに、大学院で専門看護師を育成することも、変化する医療へ柔軟に対応して看護の質を高めることに貢献すると思われれます。そして、日本看護協会による認定看護師制度の発足は救急、褥瘡・ストーマケア、癌性疼痛看護、ホスピスケアなどを専門とする認定看護師を誕生させてきています。

21世紀に医療はどのように変化するのでしょうか。今考えられることは、高騰する医療費を抑制するための対策が推進されることです。健康保険から支払われる医療費は出来高払いから、上限が規定された包括払い方式への移行が検討されています。入院期間は短縮化され、在宅療養に移行し、訪問看護を含んだ病院外来の機能が重要になるでしょう。病院では、必要最低限の入院期間で質の高い医療を効率よく提供することが要請され、当然のことながら、1人ひとりの患者に提供する治療や看護の根拠を明確にすることが求められます。一方、2000年に介護保険制度が始まり在宅介護が注目されてきましたが、高齢社会から超高齢社会へ進む状況を考えると、高齢者介護は大きな社会的課題として残されます。医療費を抑制するためには、むしろ高齢者自身が健康を維持したり増進するための方策が重要になってくるでしょう。

看護が臨床から地域へと拡大していくなか、どのような専門技術を提供できるのか、看護の専門性を確立していく時代になると思われれます。その1つの方向性として、治療技術の発展に伴い、医師と協同して患者の身体に介入する専門技術は、ますます専門分化して高度な判断力に裏付けされた技術を目指していくでしょう。もう1つには、看護が主体的に判断できる専門技術を目指す方向性です。現在、看護では質的研究が活発ですが、患者の発言をデータとして、その意味を概念化することによって看護独自の機能を模索する動きのように思えます。この方向は、看護介入としての専門技術の確立をめざすものであり、ケアリング、セルフケア、患者教育、ヘルスプロモーションなどがキーワードとなりそうです。ここに、行動分析学との接点があると私は考えています。

看護婦(士)の役割は、医師の治療方針に基づいて協同して医療行為を行うと共に、患者が健康回復にとって最も望ましい療養生活となるように援助することです。例えば、医師が医学診断を確定して抗癌剤による化学療法を実施するとき、看護婦は化学療法の内容を理解して、輸液管理、副作用を始めとする患者の観察、苦痛緩和などを行います。抗癌剤の副作用として脱毛が予測されれば、抗癌剤の血中濃度が高い時間帯は毛根の血流を抑制して脱毛を減少させるために、頭部冷却法で介入します。手術療法後には、正常な経過であるかを観察して判断すると共に、輸液の管理や疼痛コントロールを行います。また、合併症を予防するための体位変換や離床、セルフケアを補うための清拭や洗髪などによる患者の生活への介入は看護の役割です。このように、治療に伴って変化する患者の状態を十分把握した上で、身体に直接介入する専門技術は発展してきました。

現在、看護が対応する問題は看護診断名として体系化され、看護介入の方法論の体系化とその効果測定の指標が提案されつつあります。最近では「行動科学的アプローチ」との表現が使われて行動に注目されてきましたが、保健行動、セルフケア行動などの行動に関する概念の提示にとどまっています。現状の看護介入方法では「説明する」が非常に多くみられます。実際、臨床では患者教育、患者指導などと表現されて、説明したり訓練する場面が多くあり、重要な看護の専門技術と考えられています。言い換えるならば、これらは患者に行動変容を求めていることに他なりません。現状では説明する内容と方法に関心が向いていますが、むしろ、手術によって変化した身体に適応するための新たな行動の形成や変容、病態に伴って必要とされる行動の維持への介入が、看護独自の介入技術として位置づけられると考えられます。さらに、個々の患者への看護介入の効果を測定して評価することが必要です。私はこれらを行動分析学に期待しています。このような構想を描きながら、嚙下障害患者に対する看護介入の技術を確立するための研究に取り組んでいます。

看護という仕事～私の日常から～

山岸由紀子(東京医科歯科大学医学部附属病院)

私は大学病院の産婦人科病棟に勤務する助産婦です。ここでの勤務はようやく1年半になります。そして、この大学病院という巨大な組織の中で助産婦・看護婦として日々奮闘(?)しているところです。

私が勤務する病棟に入院している患者さんは、婦人科の病気で手術や抗癌剤の治療を受ける人、不妊症の検査入院、体外受精を受ける人、流産や早産の兆候があり入院が必要な妊婦さん、そして、出産されたおおかさんと生まれたばかりの新生児などです。

こういう人達のケアが主な仕事になるのですが、週に3日ある手術日にはほぼ1日に2件の手術が予定されているので、手術前後のケアは私たちの仕事の中でも大きなウエイトを占めます。一般的な手術の場合、術後1日目(手術の次の日)から歩行を開始します。しかし、術後1日目ではまだ痛みが強かったり、点滴をしていたりするので一人で動くには危険を伴います。そこで、手術の創の状態を観察し、問題がなければ少しずつ体を起こすところから始め、めまいがないかなどを確認しどこまで動けるかを判断します。そして、体を拭いたり(清拭)、更衣介助などをおして積極的に体を動かしてもらいます。痛いからといって長期間寝ていると術後合併症のおこる危険が大きくなるため、痛みをやわらげるなどして早期離床を促し、できるだけ早く日常生活動作(ADL: activities of daily living)を拡大できるように援助します。それでも痛みが強かったり、麻酔の影響、めまいや吐き気などのために難しい場合もありますが、早期離床のメリットは大きく術後の回復に影響するので、異常がないかを確認しながら不快症状をコントロールし、スモールステップでADLの拡大を進めていきます。

これ以外にもいろいろな仕事があります。例えば、血小板が正常値の10分の1ぐらいしかなく、ちょっとした打ち身ですぐに皮下出血をおこしたりする患者さんがいました。高齢であり自宅でもよく転んで打ち身や時には骨折もしていたようです。しかし、危険だからといって動いてはいけないのではなく、いかに安全に日常生活を送ることができるかを考え工夫することが必要になります。そこで、こういう患者さんはトイレなどに行く時も転倒しないように看護婦の付き添いが必要となるので「動く時はナースコールしてくださいね」と何度も念を押すのですが、看護婦さんに悪いからとか大丈夫だからと言ってナースコールを押さずに一人でベッドから離れてしまいます。こうなると最終手段で「マッタくん」を使うことになります。「マッタくん」というのはバスマット2枚分くらいの大きさのマットで、その上に乗るとナースコールが鳴る仕組みになっています。これを患者さんのベッドの脇に敷いておきます。ナースコールが鳴ったら動いているんだなとわかるので転倒しないように付き添うのですが、「マッタくん」によるナースコールが鳴る頻度が多いので苦労します。また、ナースコールを聞いて、その患者さんのところに慌てて行くと、医師や掃除の人が踏んでいたりすることもあります。

また、切迫早産といって妊娠10ヶ月に入る前に陣痛のようにお腹がはってしまう妊婦さんが入院してくることがあります。このような場合はお腹のほりを抑える薬を持続的に点滴しながら安静にしてもらうのですが、安静が長期間になると、少しぐらいなら大丈夫だろうと動いてしまうことがあります。そうしたい気持ちは十分わかるのですが、早産になってしまったら、あかちゃんが未熟児で生まれることになります。しかし、妊娠は病気ではないのでこういったことを理解し安静を保ってもらうには苦労します。結局、状況にもよりますが、1日1回車イスを使って電話するのはいいですよとか、排便のときはトイレに行ってもいいけれど、排尿はポータブルトイレを使ってくださいねとか、どこまではいいけどどこからはダメということを相談しながら決め、あと何週間たったら排尿もトイレでいいですなど、今後の見通しを説明し、折り合いをつけながらやっていきます。しかし、4人部屋でポータブルトイレを使用することは患者さんにとってはとてもつらいことです。プライバシーの確保や同室者の理解を得ること、羞恥心や環境への配慮など私たち看護者が気をつけなければならないことがたくさんあります。

他には、少し深刻な話になりますが、末期の癌などで治る可能性の少ない患者さんが、病状が悪くなっていくときに、「なんでこうなったの」とか、「もっと早く入院させてくれたらよかったのに」とかいろいろ不安や不満を訴えてきます。また、癌の痛みは本当に激しく何日も痛みのために眠れなかったりするので、痛みをやわらげるためにモルヒネを使うことがあります。しかし、モルヒネの量が多くなると眠くなる人もいます。そうすると患者さんは眠ったまま目がさめなくなるのではないかと不安になり、眠くなるから薬の量を減らしてほしいと訴えたりします。痛みがとれてやりたいことができるのが一番いいのですが、痛み、眠気、体のだるさ、吐き気などの症状は個人差が大きくそれらをやわらげる方法を見つけるのはとても難しいことです。患者さんと看護婦と医師との間でよく

話し合っているいろいろな決めていくのですが、ターミナル(末期)の患者さんやその家族がもつ不安や不満に耳をかたむけることは、私たちにも結構つらいものがあります。これが仕事なのですが…。

ここまでさまざまな場面について書いてきましたが、このような場面に1人の看護婦がずっとついていられるわけではありません。患者さんそれぞれに援助したいことがたくさんあるのに、やるべき仕事には優先順位があってすべて のことに手がまわらない時もあります。このような時、看護婦は患者さんに「だいじょうぶですか」と聞きながら、無意識に足が外を向いたりします。もう少し患者さんのニーズをゆっくり聞くことができる余裕があればなと思うことが多々あります。

このように苦勞することも多い仕事ですが、楽しいこともあります。手術後 自分で髪が洗えない人の洗髪の介助をした時には、とても喜んでもらえるので 私自身も嬉しくなります。また、母親教室で呼吸法などの指導をして、「実際に役に立ちましたよ」と言ってもらったときなどはとても充実感があります。また、あかちゃんをお風呂に入れたり、おっぱいをじょうずに吸えるように練習させたりすることは、とにかくあかちゃんがかわいく楽しい仕事です。そして、助産婦として分娩に立ち会ったとき、無事に元気なあかちゃんが生まれ、うれしそうなお母さんやお父さんをみていると、「この仕事やめられないのよ ねっ」と思うのです。

リレー特集: 私の好きなこの論文—その3—

内田一成(愛知学院大学)

昨年4月に愛知学院大学文学部心理学科に赴任し、あわただしい日々を送っています。標記タイトルのリレー特集ということで、今回私は、ロヴァースの「自閉症児の治療についての疾病モデルと行動モデルの対比: 史的展望」と「自閉症児に対する包括的な行動理論: 治療と研究のための枠組み」を取り上げようと思います。この2つの論文は、自閉症に対する応用行動分析の発展史に大きな影響を与えたもので、ご存じの方も少なくないと思います。原題は、

Lovaas, O.I. (1979). Contrasting illness and behavioral models for the treatment of autistic children: A historical perspective. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 9, 315-323.

Lovaas, O.I., & Smith, T. (1989). A comprehensive behavioral theory of autistic children: Paradigm for research and treatment. *Journal of Behavioral Therapy and Experimental Psychiatry*, 20, 17-29.

自閉症に対する行動分析は、ファスター(Ferster, C.B., 1961: Positive reinforcement and behavioral deficits of autistic children. *Child Development*, 32, 437-456)の記述的行動分析に始まります。内容を素描すると、1歳半~4歳の間にわたる親の育児レパートリーの全般的障害、育児行動以外の他の行動の優勢さ、嫌悪に基づく子どもからの逃避などの生育環境によって、条件性強化刺激や般性強化刺激の獲得困難、新たな環境の直面による重篤な情動・自律反応の誘発と強化されるべき望ましい行動の抑制などを背景に、自閉症行動症候群は形成されるというものです。

この見解は当時隆盛を極めていた「心因論」を行動分析的に記述しただけと批判されました。また、多くの実証的研究によって心因論が否定され、脳障害を中心とした生物学的障害が有力視されるに及んで、応用行動分析はその点についての概念的枠組みを持たないまま、「臨床手段」の面だけが強調されざるを得なかったという経緯があります。これはちょうど海図を持たないで航海することに喩えられるかもしれません。この混迷に明確な概念的枠組みを提供したのが前者の論文であり、その見解をさらに洗練させたのが後者の論文 だったのです。

すなわち、従来の疾病モデル(illness or disease model)では、自閉症の根底に特定原因を想定し、それを治療さえすれば自閉症そのものが治るという捉え方に立っていました。このようなアプローチは説得力があり、多くの期待を抱かせます。しかしながら、ことごとく失敗に終わった次第です。

それに対してロヴァースは、行動モデル(behavioral model)を提起したわけ です。このモデルでは、応用行動分析学的研究を中心とした多くの実証的な臨床知見(自閉症児の行動は他の生体から導き出された学習法則に符合する。自閉症児は多くの別々の行動障害を有し、行動が異なると統制変数も異なる。自閉症児は一定の環境において他の人と同様に学習する。)に基づいて、

自閉症児の行動障害は中枢神経系の障害と通常環境のミスマッチに由来しており、それは環境の操作によって解決できるという考え方に立ちます。また、そのための方法論的枠組みとして、次の3つが提起されました。

第1は、自閉症の診断的単位よりも個々の特定の行動に焦点を当てることです。これによって、行動ごとの正確な測定が可能となり、個人差の問題も解消したわけです。

第2は、病因や早期の生育史よりも現在の環境を重視することです。これによって、環境の実験的操作に基づく統制変数の解明や効果的治療教育方法の発見が可能になったわけです。

第3は、仮説演繹法よりも帰納法を重視することです。これによって、多くの研究者の、多くの臨床データによる一大応用行動分析(行動療法)プログラムの累積が可能になるというわけです。

広く応用行動分析学を見渡すと、この行動モデルの考え方は、決して真新しいものではありません。1979年以前にも、例えば、知的障害に対する応用行動分析学領域には存在していたわけです。じゃ何故、自閉症に対する応用行動分析では、このモデルが一条の光になったのかという疑問が生じるかと思えます。それだけ自閉症研究そのものが混沌とした状況だったということでもあります。じゃ何故、それだけ混沌としていたかということ、大多数の研究者が「実証的証拠(evidence)」に基づかない考え方(言語行動)の刺激性制御下にあったということになりましょう。

人はかけがえのない存在であり、人に対する臨床的理解や臨床的介入には大きな責任が伴います。それゆえ、臨床心理学的な実践も研究も、権威・習わし・主観に基づくやり方から、厳密な研究によって効果の確認されたやり方に基づいて行われる必要があります。この方向性は1995年頃から強調され始め、「実証的証拠に基づく心理学」(Evidence Based Psychology)、ないしは「実証的証拠に基づく臨床心理学」(Evidence Based Clinical Psychology)といわれ、「実証的証拠に基づく医学(Evidence Based Medicine)」や「実証的証拠に基づく精神医学(Evidence Based Psychiatry)」とも呼称し、広く臨床科学の世界的潮流でもあります。もちろん、臨床心理学分野で「実証的証拠に基づく臨床心理学」の考え方の土台になったのが、行動療法や応用行動分析であったことは言うまでもないことです。

こういうことを考えるごとに、着実な一歩一歩の大事さが厳しく問われるのだなあと思う今日この頃でもあります。

次号の執筆者として、上越教育大学に移られた加藤哲文氏を指名します。「てっちゃん、よろしく!!!」

国際会議参加報 「行動主義と行動の科学に関する国際会議」

行動分析学的目的在増進人類全体之生活
長谷川芳典(岡山大学)

2000年12月13日から12月15日まで台北市の圓山大飯店で行われた“Special International Congress on Behaviorism and the Science of Behavior(千禧年行為主義暨行為科学国際會議)”について参加報告をさせていただきます。

この国際会議は、Auburn大学のPeter Harzem教授が中心となって、世界各地で隔年で開催されてきた。日本では1996年10月7日から10日まで、横浜プリンスホテルにて第3回目が行われており、この時の参加者は事前登録者だけでも143名に達していた。なお、このときの会議概要は行動分析学会の [ニューズレター](#)、長谷川による簡単な報告は [こちら](#)にある。

4年前の横浜での印象から大規模な会議を予想していたのだが、今回は台湾の学生を含めて80名程度。日本からは6名(うち3名は何と岡大から)のみ。もっとも、これほど少なかったのにはワケがある。この国際会議はもともと2年に一度開かれることになっていたのだが、今年はずでにメキシコで開かれたばかり。裏話として聞いたところによれば、何でも台湾のほうで特別に援助予算がつけられ、年内に消化しなければならなくなったために急遽開催されることになったのだという。そのため、日本国内の関係者の大部分は勤務の都合などのため不参加とせざるを得ないところがあった。また米国の研究者たちは、日本のお盆の帰省ラッシュにあたるクリスマス控えて長期間

滞在することができなかった。とはいえ、台湾側の受け入れ態勢は相当なもので、第一日目の午前中には、何と台北市長がやってきて直接英語で挨拶をされた。

私自身が参加したポスター発表(タイトル“What is wrong with daily life in the Oriental world of today? —A behavior-analytic view—”)の会場は、圓山大飯店の中でも最も眺めのよい1階(ロビーの上の階)の西南角の個室に設けられていたが、発表件数は何と4件のみ。ポスターを貼る掲示板のサイズが直前になってやっと分かるなど、この面ではドタバタしていた。しかも、発表の時間帯が参加者全員に対する昼食招待の時間にあたっており、食事が終わる頃にはマロット先生の午後の発表が始まってしまったため、訪れる人はきわめて少なく閑古鳥が鳴きまくっていたのがまことに残念であった。

参加者が少ないにも関わらず、講演のほうでは興味深い話題が続いた。紙面の都合で、ここではいくつかの個人的感想のみを記すことにしたい。

まず、佐藤方哉先生の講演は、行動分析の視点から日本型の「文化」の特徴を論じておられた。「日本vs欧米」という比較軸を持ち込んで複雑な現象を分かりやすく説明しようという試みは、『菊と刀』、「自己高揚のアメリカ人、自己批判の日本人」、「日本語の名詞はコト、英語の名詞はモノ」、内山節の『自由論』、荒井一博『文化の経済学』など、すでに多方面で行われている。しかしこれらの論調で注意しなければならないのは、たとえ日本人のご先祖が農耕民族型、欧米人の先祖が狩猟民族型であったとしても、それがダイレクトに現代社会に反映するとは考えにくいということ。それを血筋、伝統、文化などの言葉で言い切ってしまうことはたやすいが、それでは科学とは言えない。「日本vs欧米」という比較軸を科学的アプローチとして成立させるためには、今の社会で、何が違いをもたらしているのかを同定する必要がある。その点で、行動随伴性の違いに求めた佐藤先生の論調は、より説得力を持つものであると感じた。

引き続いて行われたHarzem先生の「Language, cultural identity, and the blending of cultures」は、私がポスター発表で意図したこととよく似た論点であった。

二日目の朝一番のEmilio Ribes-Inesta先生の操作主義の話は、本人ご欠席、Harzem先生代読という変則的な形で行われたが、内容は私好みのものであった。物事をカテゴリカルに質的に定義する場合と、数量的な変化を捉える場合の定義する場合の区別、「コト」を「モノ」として定義してしまいがちな英語特有の問題などいろいろ考えることはあったが、これらは別の機会に述べることにしたい。

二日目午後の「Morality, religion, and the science of behavior」についてのシンポジウムでは、まずMalott先生が「God is fear」という演題でパワーポイントを使った「マルチメディア講演」をされた。その日の夕刻に行われた「A theoretical behavior analysis of human sexuality」もそうだったが、Malott先生は講演中は黙々とノートパソコンの前で操作するだけ。BGMの音量が大きすぎて隣の会場からクレームがつく場面もあった。発表自体は『Elementary Principles of Behavior』の26章を読んでいればすぐに理解できる内容だった。

このシンポでは他に、Martha Pelaez先生とJacob L. Gewirtz先生から話題提供があったが、当然のことながら何度かルール支配行動について言及された。たまたまトイレでMalott先生にお会いした時にHayesのルール支配行動についての考え、特にFunctional Analytic Psychotherapyについての御意見を伺ってみたが、ルール支配をどう活用するかという基本的なところでマロット流のGoal-Directedな方向とはかなりの違いがあるとの印象を受けた。

Malott先生とはなぜかトイレで3回もお会いした。一日目に便器の写真を撮っていたのでずいぶん変わったことをするものだと思っていたら、夕刻の講演の中でその画像がちゃんと使われていた。

このほか、全般的なことになるが、今回の会議では、どんなに英語が下手でも自信をもって参加できるという印象を受けた。そもそもPeter Harzem先生ご自身、ネイティブではないのでアクセントに訛がある。台湾の研究者たちは、米国留学経験のある数人を除いては日本人と変わらぬ喋り方をするので、こちらが気後れする必要はない。国際学会に参加してみたいが英語が苦手な恥ずかしいという方は、とりあえず、この種の国際会議に参加して自信をつけられたらよいのではないかと思う。次回は2002年の9月18日～21日にHarzem教授ご自身が所属するAuburn大学(アラバマ州)で開催される予定とのことだ。

伊田政司(常磐大学)

昨年末、世紀末の12月に台北市で開催された「行動主義と行動の科学国際会議」に出席した。会議日程の前半については会議に出席されていた長谷川さんが紹介されるということなので、私は最終日(会議三日目、12月15日)の様子について、特に台湾側の発表などについて簡単に。

行動分析のメーリングリストでこの会議を知ったのだが、発表申し込みの締め切り日までかなりきわどいタイミングだった。しかし、台湾ではどんな研究が行われているのだろうか、という好奇心から、なんとかポスター発表の準備をして参加した。しかし、会議自体も急に決まったらしく、発表申し込みの後も、受付の返事やプログラムの連絡がなくて困った。結局、プログラムは会議の受付で当日受け取ることになった。

で、お目当ての台湾での研究についてであるが、台湾側の発表は三日目(会議最終日)のシンポジウムと発表が各1件だった。横浜で開催されたときのように地元の研究者のポスター発表があるものと期待していったのだが、この点は、ポスター発表で同席した長谷川さんともども、ちょっと期待はずれというか拍子抜けだった。

三日目のプログラムは、午前中に、

- (1) E. Morris, USA: Whiter psychology, whether behavior analysis
- (2) P. Moderato, Italy: Cultural roots and personality differences in behaviors(s)
- (3) S. Yen, USA: Fred Keller's personalized system of instruction and computer technology: What our currently failing educational system can learn from his wisdom

午後からは、

- (4) M. Pelaez, USA: Early behavior-analytic interventions with infants at-risk of developmental delays

があって、

- (5) シンポジウム

A follow-up rehabilitation program using a cognitive behavioral approach in treating substance abusers in Taiwan: A preliminary report

<1> Cheng Ching Ming, Taiwan: The evolution of cognitive behavioral approaches in treating substance abusers in Taiwan: A preliminary report

<2> S. Yen, USA: The evolution of cognitive behavioral treatment in drug addiction: 1960 to the present

- (6) 閉会式

という日程だった。このうち台湾側の発表についての印象について。(3)のYenさんは、台湾出身の(台湾の怪人というおもむきの、たぶん)台湾系米国人で、今回の会議のオーガナイザーの一人でもある。Yenさんの講演は、主催校(台北市立師範学院)の学生向けに話したいということで、中国語でPSI(個人別学習システム)の話がされた。PSIの発案者であるF. S. ケラーのもとで学位をとられた方らしく、ケラーやスキナーと一緒にスライド写真を提示しながら、演技力豊かに話をされていた。中国語のなかにとときどき混ざる英語の術語から内容が想像できる場所も多少はあって、ケラーのグッバイ・ティーチャーの話をしている様子をうかがうことができた。将来、先生になるかもしれない若い学生に諭すように、また、興味をそがないようにユーモアを交えたダイナミックな話し方は非常に印象的なものだった。私は中国語はまったくわからないのであるが、話しの様子や学生の様子などみているだけでもおもしろいレクチャーだった。たぶん学生たちは教師になったときにYen先生のことを思い出すのではないだろうか。

また、午後からのYen先生がコーディネイトされた薬物濫用についてのシンポジウムでは、認知・行動療法の実践例について台湾側の発表者(3名)による台湾での薬物やたばこの濫用のコントロールの話があった。このセッションも学生むけに中国語でおこなわれた。

最後に閉会のセレモニーがあって、いろいろエライ人の話がつづいた。台湾側の人の挨拶の中で、会議は雨とともに始まり、晴天で終わった、というような意味のことをいわれた。話の形式が日本的な挨拶と似ていると思った(日本が中国式をとり入れたというのが正しいのだろうが)。夕方からは台湾側主催者が招待してくださったフェアウエルパーティが(モンゴリアン・バーベキューの店で)あって、会議の日程は終了した。

台湾でどのような研究が行われているのか、という参加の目的を果たしたとは言い難かったので

あるが、印象としては、心理学というのは日本で言う精神医学的な臨床的なものというように受け止められているようで、基礎的な行動の研究はこのような意味では「心理学」的ではない、というように受け止められているような感じを受けた。

しかし、台北名物の夜市に古本屋があって、のぞいたところ中国語の心理学の教科書らしい本があった。図表から判断すると日本での基礎的な「心理学概論」のような構成になっていたの、大学での教育は日本の心理学専攻の内容とそれほど変わらないのかもしれない。

高雄市からやってきたという若い先生(李博士)にポスター発表のことで話しかけられた。アメリカで学位をとられ現在は高雄市で英語を教えておられるということだった。特に言葉の教育に行動的な考え方を取り入れたいということで、今回私が発表した系列学習の課題は言語とも関連があると思うと言われて、いろいろ熱心に質問された。李博士は行動分析について、「(米国?での)指導教授に行動分析は特殊なものであるから、というように教えられていたので、ほとんど知識がないのだが、この会議に出席して、いろいろな話を聞いて、英語の指導に応用できるのではないかと考えを変えた」、と言われた。大学では行動分析のことを学んでいないということで、基本的なこと(弁別刺激、強化随伴性、刺激般化など)をいくつも質問されたのであるが、私の理解の範囲で答えたのであるが、英語の問題もあり納得されたかどうかかわからないのであるが。私は、距離的には非常に近いにもかかわらず台湾での研究をほとんど知らず、韓国や中国についても同様である。

この会議は台北市の援助がかなりあったということで、わざわざ市長まで挨拶にこられた(ちなみに市長の馬氏は英語に堪能で、若くノーブルで、将来有望な政治家という印象だった)。会議会場(圓山大飯店)といい、ホスピタリティといい贅沢な会議だったので、参加されなかった方は残念でした。それにしてももうすこし参加しやすい時期だったら、よかったのに、という会議だったのです。

最後に、この会議の英語訳はSpecial International Congress on Behaviorism and the Sciences of Behavior、とサイエンスが複数形になっていた。The Science of Behaviorが正式な呼び名と思っていたのであるが、新世紀にはいろいろな行動分析学が生まれ(てきている)、という意味なのだろうか。

追伸。私は立派な行動主義者ではないので正確な内容については佐藤先生はじめ出席された長谷川先生にお問い合わせください。

書評: こんな本を書いた! 訳した! 読んだ!

『自己の起源—比較認知科学からのアプローチ—』

板倉昭二 著

金子書房 1999年10月 2200円(税別)

板倉昭二(京都大学)

本書は、自分がこれまでおこなってきた、「自己」に関わる仕事をまとめたものである。自分の立場が比較認知科学ということなので、「比較認知科学からのアプローチ」を副題として付し、ヒトを含む霊長類を対象として、自己に関する認知機能の比較を中心的視点として論じたことを強調した。また本書の大きな特徴は、研究はすべて実験的な分析を通しておこなわれ、その結果得られた知見を綴ったものだけということである。ただ、成功したかどうかは疑問であるが、わかりやすく伝えるということにはかなり力を注いだ。

構成としては、4章からなっており、第1章では、近年の自己に関する研究の理論的なフレームを、特にヒトの発達の視点から紹介し、第2章では鏡による自己鏡映像認知の問題、第3章では、チンパンジーによる人称代名詞の学習や所有意識についての検討、そして第4章では、最近のトレンドである「心の理論」と「自己」との関係について、自分のオリジナルな実験をベースに論じた。

もちろん「自己」というとてつもなく大きな問題を、これだけで語り尽くせるはずもないが、「自己」を考えるための切り口のひとつであることが読者の方に伝われば、著者としては本望である。行動分析学的アプローチで著した本ではないが、行動分析学会会員諸賢からの御意見を頂ければ幸いである。

『心理学論の誕生—「心理学」のフィールドワーク—』

サトウタツヤ・渡邊芳之・尾見康博 著

北大路書房 2000年6月 2800円(税別)
サトウタツヤ(福島大学)

この本は、副題が示すように、日本の心理学界を1つのフィールドとして考えてみたものである。著者の3人は都立大の同級生+後輩という関係であり、それぞれが紀要に書いた論文を3本ずつ収録している。これらの論文は、心理学の概念(渡邊)、心理学の方法(尾見)、心理学の制度(サトウ)、について扱っており、それなりに体系が保たれている。だが、論文だけでは読みづらいので、前後に座談会を配している。つまり、論文で言いたかったことを座談形式で解説しているのである。

内容について、多少踏み込んで紹介すると、心理学における構成概念の特徴とその使い方、統計的手法に縛られる心理学者たちとそのカウンターとしてのフィールドワーク、心理学と社会の関係を考える際の有効な補助線としてのモード論、などについて知ることができる。

なぜ、この本が行動分析学会のニューズレターで紹介されるのか訝っている人もいると思うので、念のために書いておくと、渡邊とサトウは行動分析学会員なのであった。私たちは、行動分析という考え方に博士課程で初めて本格的に出会った。行動分析に基づく研究は行っていないが、行動分析を知ることによって私たちはその後の論考をシャープに育てていくことができたのだと感じている。

座談会だけなら結構読みやすいので、是非、読んでみて下さい

行動分析学メーリングリストを御活用下さい

望月要(メディア教育開発センター)

はじめに

bml (Behavior Analysis Mailing List) は、行動分析学に興味を持つ人達の情報交換に役立てるために、1997年の6月から運用を始めたメーリングリスト (ML) です。この原稿を書いている1月21日現在336名の方が参加して下さっています。このMLは日本行動分析学会の会員専用ではなく、行動分析学に興味を持つ全ての人に公開されていますが、最近では、各種公開講座、年次大会のお知らせ、海外学会の情報、教員公募情報など、会員の皆様に役に立つ情報を投稿して戴けるようになってまいりました。このまま順調に育てて戴ければ、このニューズレターの刊行間隔の隙間を埋める迅速な情報伝達の手段として会員の皆様のお役に立てると思います。

インターネット上の心理学の情報、それも《使える》情報は残念ながら僅かしかありません。その大きな原因の1つが、MLでの情報交換が活発でないことにあります。bmlに投稿された質問や回答は自動的にウェブに掲載され、goo などインターネットの検索エンジンから検索できるようになります。bmlで活発に情報が飛び交うことは、同時にインターネット上の行動分析学のリソースを増やすことにつながります。大袈裟な言い方をすれば、ネット版《行動分析学事典》が少しずつ書き溜められているということになるかも知れません。

MLは《ちょっとした》情報の交換に便利な道具だと思えます。勿論、大問題を提出して議論を戦わせることも可能ですが、むしろ、ちょっと疑問に思ったこと、ちょっと調べたけれど分からなかったことを気軽に質問する、それに対して、簡単でもいいから自分に出来る範囲の回答をする、という使い方にMLの利点があります。研究室の仲間や同僚と話すような気軽さでbmlを活用して下さい。あなたの質問が、他の人にも役に立つ情報を引き出せるかも知れません。どんな簡単な回答でも、困っている人には大きな手掛かりになるかも知れません。「でも、詰まらない質問をしたら恥ずかしいし、怒られるかも知れないし...」とお思いですか？ そんな心配はないと思います。真剣に知識を求める行動に対して嫌悪的な結果を随伴させるなんて、日頃行動分析学を実践している人達がそんなことをするわけないと私は信じています。

これからbmlに参加しようとされる方へ: 参加の方法

メールによる自動登録方式を採用しております。参加御希望の方は bml-ctl@behavior.nime.ac.jp というアドレス宛に、メール本文の最初の行に「subscribe Sato Taro」(「」は必要ありません) というように、「subscribe」という命令と、その後、スペースを1つ入れてローマ字表記の苗字、もう1つスペースを空けてローマ字表記の名前を書いてリターンして下さい。文字は全て半角英字でお願いします。スペースも半角です。この1行以外に余計なメッセージは書かないで下さい。登録の為のメールの宛先は記事を送る宛先とは違っています。御注意下さい。

上の登録メールを送って暫くするとMLを管理しているfmlというプログラム(メールサーバー)から次

のようなメールが送られてきます。

```
>>> subscribe Sato Taro
こちらはメーリングリスト(ML)のfmlです。
これはMLに登録する意志の確認をするメールです。このMLに登録していいなら
confirm 2001011214060527864624527267 Sato Taroという一文を
bml-ctl@behavior.nime.ac.jpというアドレスまで送り返して下さい。
(以下省略)
```

これは、他人の名前で勝手にMLに参加してしまう、という悪戯を防ぐための確認です。「confirm」で始まる1行を、そっくりそのままメール本文の1行目に書き写して送り返して下さい。上のメールに対して返信の操作をして、「confirm」で始まる行以外を全て消してしまうのが簡単かも知れません。その場合は「confirm」で始まる行の先頭に「>」などの引用の記号が付かないように注意して下さい。ここまでの手順が上手くいかなかったり、「confirm」の後の数字列(これが登録確認のパスワードです)を無くしてしまったら、最初の「subscribe」のメールからやり直して下さい。

確認メールを送って暫くすると、参加登録を行なったことをお知らせするメールが届きます。これで、あなたはbmlのメンバーです。活発な投稿をお待ちしております。記事の投稿はbml@behavior.nime.ac.jp宛にお願い致します。記事にはお名前と御所属を明記願います。

bmlの使い方: 管理人からのお願い

まず技術的なことを2点お願い致します。(1) 投稿はテキスト形式、日本語の文字コードはjisをお使い下さい。html形式などでの投稿、特定のワープロソフトでしか読めない形式での投稿、ファイルの添付はお断り致します。(2) 新しい話題を提供するときは、メーラーソフトの返信の操作ではなく、新規メール送信の操作でお願いします。逆にある話題への返信メールの場合には、新規メール送信ではなく、返信の操作でお願いします。これはメールを内容によって正しく対応づけて分類できるようにするためです。詳細は <http://behavior.nime.ac.jp/behavior/bml-j.html> を御覧下さい(今迄メールサーバーのバージョンと説明のバージョンが違って御迷惑をおかけしましたが、今回、説明を更新しました)。

その他のことは、ごく当り前のMLのマナーを守って戴ければ、それで十分ですが、2つだけお願いがあります。(1) 参加の御挨拶メールはいりません。MLに加入したとき、挨拶のメールを出す習慣がパソコン通信などにあるようですが、bmlでは必要ありません。(2) bmlに投稿された記事は、そのまま自動的にhtml化されてウェブに掲載されます。ですから、広く一般公開したくない個人情報など(メールへの署名なども含めて)については、御注意をお願い致します。

投稿された記事の著作権と引用については、当面、次のようなルールを提案しています。(1) bml内での引用は事前了解の必要無く行える。(2) 他のML、ネットニュース、パソコン通信、個人的なメールへの引用・転載は、そのメールを投稿した人から事前了解を得る。(3) 印刷物への引用・転載、学会発表や研修会、講習会等の資料への引用・転載、その他ネット上以外での利用については、メール投稿者の事前了解を得ると同時にbmlからの引用であることを明記して戴けると嬉しいです。

商品の宣伝など商業的な利用についても、それが特に行動分析学に役立つものであれば、投稿して戴いて結構です。「当社はこんな書籍を出版しました」、「次のABA参加に最適な格安航空券が提供できます」というような情報は歓迎したいと思います。

アドレス変更と脱退

メーリングリストに参加するアドレスを変更するには「chaddr 現在のメールアドレス 新しいメールアドレス」という1行を本文に書いたメールを bml-ctl@behavior.nime.ac.jp宛に送って下さい。但し、このメールは必ず現在の(古い)アドレスから送って戴く必要があります。bmlを脱退するには、本文1行目に「bye」あるいは「unsubscribe」とだけ半角文字で書いたメールを、bmlに登録してあるあなたのE-mail アドレスから bml-ctl@behavior.nime.ac.jp宛に送って下さい。

勤務先の変更などで、登録してある以前のアドレスからメールが送れなくなってしまったときは、管理人宛 (bml-admin@behavior.nime.ac.jp) に、その旨御連絡下さい。

では、bmlの御活用をお待ちしております

学会情報

常任理事会ヘッドライン

◆会員数(2001年1月20日現在) 492名(一般394名、夫婦6名、学生92名)。会費長期滞納者の退会があったために前回より少ない数字になっています。

◆20周年記念事業としてアジア行動分析者会議(仮称)を開催: 2002年の夏 から秋に開催予定。3月までに組織委員会を立ち上げて本格的な準備を開始します。2002年度年次大会はこの会議と同時に併行開催する予定です。

◆高校生向け公開講座、大雪の中で熱く盛れる 去る1月27日(土)、昨年に引き続いて2回目の高校生向け公開講座「心理学とはどんな学問だろう」が東京都立新宿山吹高校で開催されました。折りからの大雪のため昨年より参加者 数は少なかったものの、講師と高校生の間で活発な議論が繰り広げられました。

◆「ことばと行動: 言語の機能的分析」(ブレーン出版)の刊行遅れる: 3 月末を目標にしていた本書の刊行は少し遅れる見込みです。編集担当者のお話では8月の年次大会までには発行できる見通しとのことです。

◆「行動分析学研究」所収の全論文を電子図書館サービスで閲覧可能に 現在、第12巻以降の所載記事について電子図書館で閲覧できますが、近い将来、すべてのバックナンバーを閲覧できるようにします。また、大会論文集も第1回大会から閲覧できるようにしたいと考えています。ついては該当記事論文の著作権を学会に集中させる手続きが必要になります。会員諸氏のご協力をお願いします。

(情報提供: 小野浩一理事長)

記事のお願いと執筆要領

皆様からの記事を募集しています。書評、研究室の紹介、施設・組織の紹介(現場に行く)、用語についての意見、学会に対する提案や批判、求人・求職 情報、イベントや企画の案内など、さまざまな内容に関する記事を期待しています。原稿はテキストファイルの形式で電子メールかフロッピー(DOS)により、以下の編集部までお送り下さい。なお、掲載された記事の著作権は日本行動分析学会に属し、ホームページでの公開を原則にしています。メールアドレスなど、一般公開を望まない情報がある場合には、事前に編集部までご連絡下さい。(第22号編集担当: 中島定彦)

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学文学部 望月昭
TEL & FAX: 075-466-3189 E-mail: mochi@Lt.ritsumei.ac.jp
